

第9回 社会教育委員会議 議事概要

1 議事

協議事項

- (1) サッポロサタデースクール事業令和2年度実施報告・令和3年度実施方針案について
- (2) 今期の協議テーマ「(仮)地域課題に対応する社会教育の在り方について～災害を例に～」について

2 日時

令和3年(2021年)1月29日(金)10時00分～12時00分

3 場所

S T V北2条ビル6階 教育委員会A・B会議室

4 出席者

- (1) 委員(出席8名) 欠席 安田委員、牧内委員
一戸委員、臼井委員、佐久間委員、鈴木委員、辻委員、土田委員、原田委員、山口委員
- (2) 事務局(6名)
小田原生涯学習部長、中目生涯学習推進課長、寺崎社会教育担当係長、小林職員、前崎職員、中原職員

5 開催形態

公開(マスコミ関係者1名傍聴:北海道通信社1名)

6 会議内容

- (1) サッポロサタデースクール事業令和2年度実施報告・令和3年度実施方針案について
ア 事務局から資料1「サッポロサタデースクール事業令和2年度実施報告・令和3年度実施方針案」を用いて説明(寺崎社会教育担当係長)
 - ・来年度の活動方針については、コロナの感染拡大状況の見通しが立たない中の案となっている。今後、今よりも悪化した状況になった場合、御説明した取組について中止や縮小になる可能性はあるが、そういった厳しい状況の中でも、できる範囲での活動は行っていきたい。

イ 質疑応答

- ・ 3点ある。1点目が、実施手続の改善で、実施申請手続のハードルが下がったのがすごくいいと思った。2点目は、令和3年度取組方針（案）の下から2番目の実施プログラムの情報を伝えやすくするというので、できたらタイプ別のプログラム紹介になっていると嬉しい。タイプ別のプログラム紹介が難しい場合、どこが主導のプログラムなのか明記されているといい。いろいろなところが主体でやっていいというのが伝わると、入っていきやすいと思う。3点目は、質問だが、オンライン開催はどれくらいお考えか。（原田委員）

⇒書類の簡素化については、できるだけ記述式ではなくチェック方式にするなど、提出書類を減らすことを考えている。2点目は、学校によってはおやじの会が主導しているところや、コーディネーターの方を複数置いて、それぞれの得意分野で関わっているところや、例えば、開放司書さんが中心となって読み聞かせをやっているところ、学習支援という形で、先生側の意向が強くなっているところなど、各学校でばらばらである。それによって頼む講師も様々で、特色のある内容になっている。3点目については、今年度、オンラインを活用したプログラムはない。コロナ禍でオンラインの必要性は感じているところ。（寺崎係長）

- ・ 例えばZOOMだと、お互いの顔が見え、一時的に少人数のグループワークに切り替えることができるなど、様々な使い方ができる。感染症の中で学校に集まるのが難しく、リスクを避けたい家庭も多い。オンラインが可能ということであれば、詳しい方が、どんどん参入してくる可能性もある。感染症が収まっても、オンライン体制を維持できれば、不登校の子にアプローチできる機会であり、イベントをオンライン化することで、参加してくれる子がいるかもしれない。是非、サタデースクールの中でも、オンラインは前向きに検討していただきたい（原田委員）
- ・ 統括コーディネーターであるNPO等が助言・指導を行って地域コーディネーターを育成するという方向だと思うが、学校との協働の仕方はどのようなイメージか。学校に派遣型にするのか、教員の方との連携イメージがあればお聞きしたい。（一戸委員）
- ・ 今やっている活動としては、プログラムに対する指導や助言程度で、教員との

連携まではまだ出来ていない。プログラムの作成段階で、学校と地域コーディネーターで事前打ち合わせをしている程度。（寺崎係長）

- ・ 2点ある。一つは、今年、視察をして運営状況を聞き取られたということなので、どのような話が出たかお聞きしたい。もう一つは、活動に熱心な地域と、経済的に余裕が無く熱心ではない地域の、言わば市内における格差の現状をお聞きしたい。コロナのため、失業や生活の問題がクローズアップされている中で、格差がもっと広がる可能性があると思っている。（辻委員）

⇒まず、視察に関して、学校や地域においては、このサタデーは良い事業との共通認識はあるが、学校側の負担が大きい。本来は学校と地域が協働し、同列のパートナーとして進めていく事業を目指しているが、実態としては地域が学校をお手伝いするという構図になってしまっている。このサタデーは、現場の協力がなければできない事業なので、困りごとや問題等の生の声を聞き、なるべく現場の意見を聞き入れた上で方針をつくっていきたい。次に、地域間の格差の話だが、確かに、特に西区が盛んにやっている。それは、サタデースクールだけではなく、学校図書館地域開放事業や家庭教育学級も同じ。地域性もあって実施がなかなか難しいところもあるが、全市的に広めていきたいため、まずは中学校区で1校やることで、そこを拠点として発信していきたい。今後、小中一貫事業の部署とも連携して、事業を進めていけないか模索している。（寺崎係長）

- ・ 現場に視察へ行くのはすごくいいこと。そこで感じたことが次の課題につながればいいと思う。行政の担当と連携をしながら、もう少しその地域の側を底上げしていけるようなことをお考えになっていると、そういう理解でいいか。（辻委員）

⇒例えば、教育課程担当課においても、小中一貫の取組を行っており、一旦は教育委員会の中で、ほかの部署と連携して何か進められるものがあればと考えている。地域の問題や学校の問題、統括コーディネーターになってくださる方もなかなか見つからない等、それを打破するために、当課だけではなく、他の部署とも連携できる部分がないか考えている。（寺崎係長）

- ・ 地域をどうするかという目線で見たら、まちづくりコーディネーターのような、地域のほうに何か機能を求められている印象を持った。うまく行政の間で

連携を取って、教育委員会も地域に関与し、まちづくりという意味でもそれを支えていくといったシステムができるといいと思った。（辻委員）

- ・統括コーディネーターの派遣で、NPO等の市民活動団体の人材派遣ということで、どういった団体に声かけしているのか、統括コーディネーターになるには何か要件があるのか。（鈴木委員）

⇒地域で活動している方や大学の方など、そういった方を今リストアップしているところ。今、探している状況で、今後増やしていきたいと考えている。（寺崎係長）

- ・様々なつながりに対応できる団体が理想だと思う。地域をうまく社会教育で結びつけていただけるような方であれば、積極的にお声がけして、登録していただくのがいいと思う。（鈴木委員）

⇒まちづくりという視点で、まちづくり協議会のような、地域の団体が集めたネットワークはもう既にあるので、本来、そことうまくつながって最終的には地域全体で子どもを育てていく、まちづくりの観点からも方向性は一緒なのだが、なかなか今はそこまで至っていない状況。人材バンクについても、その方自身がどんな方か見極めが難しいので、皆様から、紹介いただけるとありがたい。（寺崎係長）

- ・コロナの状態が収束するかどうか分からない状況の中で、少しでも安心感を与えるために、ガイドラインが必要ではないかなと思う。人数制限など、こういう状態だったらできますよという、ガイドラインを示すべき。何かあったときに、責任の所在を明確にする意味合いもある。サタデーの予算を、感染症対策の様々なものに使うことが認められるのか。（佐久間議長）

⇒認めている。（寺崎係長）

- ・先ほど、オンラインという意見もあったが、これを実施するときにはライセンス料などが認められるのか。もう一つは、2023年度までに小中学校に、子ども1人に対し、1台のパソコンといった話を聞いているが、それをサタデーで使うことが可能なのか。それが可能であれば、実施するプログラムの選択肢が広がるので、可能な範囲で御検討いただきたい。（佐久間議長）

(2) 今期の協議テーマ「(仮) 地域課題に対応する社会教育の在り方について～災害を例に～」について

ア 事務局から資料2「第9回社会教育委員会議 協議資料」を用いて説明
(寺崎社会教育担当係長)

以下説明要旨

- ・「1 報告書のタイトル(協議テーマ)」として、前回の意見を踏まえて、本日は「地域課題に対応する社会教育の在り方について～災害の経験から考える～」ということで提示。報告書の完成に向けて、一旦確定させたい。
- ・資料右側に記載している項目ごとの主な内容について説明し、目次とともに、報告書の構成や大まかな流れを確認。
- ・本日は、構成案を確定していただきたい。また、項目4番に記載している提案及び方策について確認をお願いしたい。

イ 協議

- ・協議テーマは提案通りで一旦確定してよろしいか。(佐久間議長)
- ・(異論なし)
- ・それでは提案どおりとする。(佐久間議長)
- ・次に報告書の構成について確認したい。(佐久間議長)
- ・構成について、提案というのは一つ一つの案という意味だと思うので、五つの提案というよりは、五つの方向性があるって、それぞれに細かな提案があるというのが本来の在り方ではないか。(臼井委員)
- ・五つの方向性があるって、その下に、それぞれに提案があるということ。それでは項目4のタイトルの部分は検討したい。他に、構成についてはよろしいか。(佐久間議長)
- ・(異論なし)
- ・それでは、構成は一旦この形としたい。次に、項目4番の提案及び方策の中身について、皆さんからご意見をいただきたい(佐久間議長)

○①「地域のリーダーを発掘・養成します」について

- ・言葉の持つ意味だけでいうと、①「リーダーを発掘・養成」という大きな方向性の下にイ「有資格者の活用」とあるのがつながらないように思う。(辻委員)

- ・「発掘・養成」という言葉を違つかたちに置き換えるか、それとも、活用ではなく、「発掘・養成」という言葉に特化して書くべきか、検討したい（佐久間議長）
- ・「有資格者」とあるが、これまでの議論を踏まえると、どちらかという資格の有無というよりは、地域での様々な経験者を見つける、経験に学ぶといった趣旨のことが入ると良いのではないかと思う。（鈴木委員）
- ・資格にとらわれずに地域の中で、例えば素晴らしい技術を持っている方とか、そういう方たちをうまく活用しようということ。（佐久間議長）
- ・提言というのは割と現状に対しての改善提案的な要素が多いと思う。そうすると、災害ということ言えば、現状というのは、私たちよりも行政のほうがよく御存じではないか。なので、現状を聞いたうえで、災害の経験をもとに見直したとき、もっとこういう改善ができないかという提言にできれば、より具体的なものになると思った。（辻委員）
- ・災害に対する現状の整理ということ言えば、以前に、札幌市の取組を、調べられる範囲で情報提供させていただいた。例えば、市の支援策として防災リーダー研修というのをやっているの、今後それをどう改善したら、もっと地域に根づくのか、そういった御意見をいただければ、それを書き込めるということ。（中目課長）
- ・提言というのは、委員の我々がこうするべき、という内容を提言するのであって、それを受けた札幌市教育委員会が、今後できることを検討していくということ。辻委員の仰る通り、より具体的なことをお伝えできると、より実現に近づくのではないか。（佐久間議長）
- ・提案の下にある方策のア、イ、ウ、エという並びが、優先順ではないと思うが、エ「リーダーによるネットワークの構築」というのが最初に来て、資格については、これからその専門性をより高めていくという方向で、社会教育の専門家を増やしていく、そういった広がりを見せるイメージではないかと感じた。（一戸委員）

○②「ICTについての学習を推進します」について

- ・イ「デジタルバイド」は「デジタルデバイド」の誤り。ウ「子どもの大人に対する学習」というのが、わかりづらい。例えば、子どもから大人への波及促進

など、子どもから大人のほうに広がっていくということをうまく表現できるような言葉があるといい。また、最近、ICTというのが、結構狭い意味で、余り使われなくなってきた状況にあり、もう少し最近の言葉を使ったほうがいい。DX (Digital Transformation) というのをよく使っている。札幌市でICTを使っているのであれば問題ない。(鈴木委員)

- ・イ「デジタルデバイドの解消」だが、高齢者の方に、スマホやパソコンなどを教えるというよりも、例えば町内会で回覧の機能を強化してもらうとか、避難所に行けば給水所の一覧表がもらえるとか、何か、とっさに行政のほうで必要な情報を配れるような仕組みがあった方がいいのではないかと思った。もっとアナログな、分かりやすい方法も準備しておいたほうがいい。(山口委員)
- ・②「ICTについての学習を推進します」というタイトルにするのか、それとも、情報格差とか、情報による分断の解決とか、あるいはそういった視点でもう少し広くくりにするというのも一つの判断。ネット社会との付き合い方の中で起きる様々な問題を、社会教育の視点として入れるべき。それから、子どもと大人に対する学習というのは、何かうまい表現はないかなと思う。世代や年齢による横の輪切りがすごく進んでしまって、それが多分ネットのツールにも反映されている。そういう意味での世代間の分裂みたいなものを、やっぱり何らかの形で解いていくようなイメージで考えると、もう少し何かうまい表現で柱を立てたらいいと思った。(辻委員)
- ・世代の分断や情報の分断というのは、④「多様なネットワークを構築します」の項目に回してもいいのではないか。ICTはICTとして非常に重要。ここは一つ項目を立てたほうがいいと思う。情報の分断や世代の分断を、多様なネットワークを構築することで超えていけるという方向にも持っていけるので、そこは④に回してもいい。「デジタルデバイド」という言葉を使わないで、情報格差と言ってしまったほうがわかりやすいと感じた。(原田委員)
- ・ICTに関しては、この間の停電でも必ずしも100%役に立つというわけではない。賢い使い方とか、付き合い方等で、情報入手手段や、情報共有だとか、その辺をうまく考えて判断できる、そういう方を養成、醸成していくという形ではないかと思う。(鈴木委員)
- ・②「ICTについての学習を推進します」については、これまで話に出てい

た、いろいろな便利なツール、新しいツールが出ているが、なかなか取りかかれ
ない世代もいるし、そういった方々にも、みんなで触っていけるようにして
いきましょうというシンプルなもののように感じる。その中で、使うにはどう
したらいいかというのが、ア、イ、ウで書かれている方策なのではないか。も
う少し抽象的な表現を使って、ICTを皆さん活用していきましょうというこ
とを伝えることがいいと思う。（土田委員）

- ・社会教育の領域では、ICTにはなかなか手が出せていなかった。接点がない
中で、社会教育とICTとの関係をこれからどう考えていくかという、問題提
起のような印象を受けた。（辻委員）
- ・コロナ禍ということで、社会教育が本当に大切にしていた対面ができなくな
った。これからICTと社会教育というのを考えていかなければならない。（佐
久間議長）

○③「全員ボランティアを実現します」について

- ・オ「何もしないボランティア」のことだが、ボランティアというのは、基本的
には、自ら志願してということなので、「レンタルなんもしない人」と同じ
ニュアンスで考えているのであれば意味合いが異なる。「レンタルなんもし
ない人」というのは、一緒に居ることで、実はいろいろな話を聞いてあげている
といった、自分は何もしないというスタンスで、実際は何かに貢献している
というもの。何かができるかもしれない、いろいろなものに対して自分が柔軟に
対応できるというボランティア、そういった意味合いの言葉にしたほうがいい
のではないか。また、ウ「マッチングアプリでコーディネート」ということだ
が、これはどちらかというと、④「多様なネットワーク」に入るという印象を
受けた。ボランティアというところなのか、あるいは、困りごとに対する救済
の意味でのネットワークなのか、どちらに入るのか。（臼井委員）
- ・今確認している構成というのは、まず先に、明日の地域を創る5つの提案とい
うことで、③「全員ボランティアを実現します」という提案がなされている。
その下の、ア、イ、ウ、エ、オのところは、こういった要素を含めた文章を作
るという認識で良いか。個人的には、マッチングアプリの活用というのは、あ
くまで説明の中で使用される表現であり、大きな項目として、「ある程度の匿
名性を維持した、気軽に参加し合えるボランティアの仕組みづくり」という記

載が、本来はア、イ、ウ、エというところに入るべきではないかと感じた。

(土田委員)

- ・これは、ボランティアコーディネートの仕組みを革新しましょうとか、新しくいろいろなことを取り入れていきましょうという提案の項目。なので、マッチングアプリというのを大きく打ち出さなくてもいいのではないか。(辻委員)
- ・先ほど臼井委員の言われた、何もしないというよりはできることを柔軟にという話しは、ウの説明書きに記載の「気軽に参加しあえるボランティアの仕組みづくり」に入るのではないかと思った。オの「何もしないボランティア」をウに集約できるということ。また、居るだけでいいというニュアンスを、提案④「多様なネットワークを構築します」に持って行けるのではないかと思った。助けを求めなければいけない人が助けを求めやすくする、発信しやすい世界をつくるにはどうするべきか、といった内容の話はこれまでたくさん出てきたように思う(原田委員)
- ・提案の前段で、前書きや趣旨の記載等、解説する文章が入れば、具体的に次のようなことを提案しますということで、入りやすいのではないか。例えば、ボランティアという概念をこういったかたちで考えることができます、といった趣旨を説明する文章を入れて、次に提言を出す。提言も、「レンタル何もしない人」をやりますということではなく、方向性や考え方などに関する提言ではないか。恐らく、ほかの項目についても、はじめに趣旨を説明する文章が入り、次に方向性の提案があって、具体的にはこういった方策が考えられるといった流れ。そこの趣旨の部分で記載できる言葉と、具体的な提言等を整理すべきではないか。(辻委員)
- ・全員ボランティアというよりは、多様なボランティアということではないだろうか。つまり、様々なボランティアの形があって、それが社会教育の広がりにつながっていくような印象。(臼井委員)
- ・全員ボランティアと書いている背景に、当事者意識を育てるというのがある。例えば、災害があったときに、地域にどのような課題があるか、それに対して自分は当事者意識を持ってアプローチしているか、そういったことを背景として、全員という表現にしている。(佐久間議長)
- ・自分ごととして捉えるというニュアンスとして、全員という言葉が入った。多

様性と言ってしまうと、また人ごとになるような気がする。（原田委員）

- ・全体の構成の中で、項目4番目の「明日の地域を創る5つの提案」に記載されている文言は全て、これまで我々が話し合ってきた内容を事務局が拾いあげたもの。そのため、報告書をまとめていく上で、記載内容の方向性や、文言の確認程度で済ませ、次へ進んだほうがいいのではないか。（土田委員）
- ・それでは、次の提案内容へ進みたい。（佐久間議長）

○④「多様なネットワークを構築します」について

- ・ア「ICTを活用した地域外とのつながり」だが、地域外というのと、余りイメージが湧かない。どこを地域内として、どこを地域外として想定しているのか。（原田委員）
- ・災害のときをイメージしたもの。ある地域がダメージを受けた際に、その他の地域から支援を受ける。それが札幌市内の中での話なのか、市外や、道外なのかまではわからない。（佐久間議長）
- ・ICTを始めたら、世界と繋がることになる。そのような世界との関りの中で、改めて地域のことを見直していくということ。先ほど、佐久間先生の仰っていた札幌以外の、あるいは道外の地域との交流や、その交流の中で学び合いや緊急時での助け合いというのが一つある。それとは別に、災害あるいはコロナを機に、ICTの可能性を知り、私たちの暮らしを豊かにしてくれる。そういう意味で、自分の住んでいる地域を見直すきっかけとなった。多様な意見や多様な暮らしを知るきっかけになるという、外とのつながりながら足元を見直すというニュアンスの意味が、ネットワークをつくることで暮らしを豊かにする学びになるのだという、そういったイメージで捉えると良いのではないだろうか。ICTを活用して、地域の外とつながり、それをもう一回暮らしに戻していくという、そういった書き方。（辻委員）
- ・それをどう自分の地域にフィードバックし、落としこめるかということ。（原田委員）
- ・この会議のキーワードとして出ていたのは、地縁のつながりに限らないということ。地縁だけではなく、NPOとか、市外でも何かの分野で得意としている団体があれば、そこにも少しアドバイスをいただくとか、いろいろなつながりがありますよねといった形が、うまく表現できればいいと思っている。（鈴木

委員)

○⑤「避難所を学習拠点として活用します」について

- ・避難所を学習拠点ということだが、これはサタデースクール、学校をイメージしているということか。そこに限定し過ぎるとまた難しいと思う。そのほかに学習拠点となり得る避難所はどこにあるか気になった。(一戸委員)
- ・具体的には学校になると思うが、地域の中でのより身近な学習の場として、一つ避難所を使うことで、避難所を理解してもらおうということ。(佐久間議長)
- ・避難所を知らない人が多い。学習の場として日常的に使用してもらおうことで、避難所を知ることにつなげるということ(土田委員)
- ・提案のタイトルとして、⑤「避難所を学習拠点として活用します」ということだが、イ「身近な学習環境の充実」にある図書館や企業、NPO法人の記載と、避難所を学習拠点ということがつながらない。タイトルとしては、身近な学習環境の充実というほうが適切なように思えた。(原田委員)
- ・避難所を日常的な活用のなかで周知していくという趣旨だと思った。常にここが避難所だと周知しながら、それ以外の用途でも使っていくことで、補足的に避難所を全市民に周知していくということ。有事のときに行った際に、建物の構造を理解していれば、使いやすい。そうすると、日常的な活用という文言が提案のタイトルに来て、方策の記載で学習といった文言が下りてくるのではないか。(一戸委員)
- ・サタデースクールは、参加する子どもや親、参加する企業等にとっては身近だが、それ以外の子どもの居ない夫婦等からすると馴染みがない。学習拠点として子ども向けのサタデースクールに、そういった夫婦が参加するものでもない。もっと大人向けの講座を開く等、毎週通える環境まで持っていかないといけない。そうすると、学校では厳しく、サタデースクールがプラットフォームになるのは、厳しい気がする。(山口委員)
- ・そういった子どもの居ない夫婦などは、図書館や地区センターでの学習ということではないだろうか。(原田委員)
- ・本日出た様々な意見を整理したい。最後の会議に向けて、本日は構成やタイトルを確認いただいた。提案部分は事務局と相談し、早やめに皆さんにご覧いただいた上で、ご意見をいただきたいと考えている。(佐久間議長)

(3) 連絡（事務局）

- ・ 次回の会議日程は、3月25日木曜日10時から、6階A・B会議室。次回会議前に報告書案をメールで送付させていただき予定。その際にご意見を頂戴し、修正したものを10回目の会議で諮りたい。（寺崎係長）